帰国報告書

国際農業開発学科　江村藍弓

１．はじめに

2018 年の 8 月から約一年間、ブラジルはサンパウロ、サンパウロ大学ピラシカバ校に留学をしていました。サンパウロ大学は州立の総合大学ですが、サンパウロ市から少し離れたピラシカバという町には農学キャンパスがあり農業や畜産、園芸など農学に関する様々な分野の勉強・研究があります。私がこの大学、そしてブラジルへの留学を決めた理由は主に四つあります。

２．アグロフォレストリー

まず一つ目はアグロフォレストリーの勉強です。ブラジルではアグロフォレストリーが近年盛んで、この農法を行う農家さんもますます増えてきています。アグロフォレストリーに必要な条件は木のような背の高い植物と背の低い作物を同時に植えることです。そのように植えることによって、単作の場合ならば傷んでしまう土地もこの方法なら回復が同時進行で行えるので、持続性があるということになります。このようなことから、森をつくりながら再生をする新しい農法と言われています。この農法をインディオの暮らしから発想を得て考えたのが農大の拓殖学科（現在の開発学科）卒業者でブラジル移住者の坂口先輩です。坂口先輩は学科卒業後、ブラジルへと仲間とともに旅立っていきました。その時から入植しているパラー州トメアスーにアグロフォレストリーのシステムを確立し、私も 2017 年の短期留学と今回の長期留学を合わせて二回行ってきました。トメアスーではこのアグロフォレストリーというシステムが主流で、高い木にはブラジルナッツ、またはアサイー、そして次にバナナやカカオ、そして一番低いところにはコショウが植わっています。農場によって異なりますが、バニラが植わっているところもあります。トメアスーは熱帯気候ですが、ブラジルの中でも南部の山の地域にいったときには、同じアグロフォレストリーにしてもその気候に合った作物に変えられていました。私は行く前、アグロフォレストリーはブラジル特有のもので日本ではできないだろうと思っていましたが、この寒い地域での栽培方法を見たことによって考えが変わりました。大きい土地がなくても、上に広がる立体てきな農法なので、土地が少ない日本でも可能かもしれないという希望の光が見えてきました。今回私が訪れた南部の農家さんですが、最初始めた時はそのようなシステムは周りには全くなく、周囲の人々から賛同が得られずつらい思いをしたとおっしゃっていました。ですが始めてみると、痩せていて農耕に不適だった土地もみるみるうちに茶色く豊かになっていったといいます。そこからは皆も納得し、今ではこの農法を一目みようと訪問者が絶え

ないということでした。この話を聞いてとてもうれしく思いました。

３．文化の違いを肌で体感する

二つ目の理由は、日本から世界一遠い国ゆえの文化の違いをあえて感じることで自分のなかの価値観を変えてみたいと思ったからです。日本で聞くブラジルのイメージといえばサンバや陽気な音楽、そして海とビーチですが、それらのものは今までの自分には関わりのないものでした。高校入学当初から異文化には興味があり、英語圏の国や東南アジアには行ったことがあったものの、南米にはほとんど関わりがありませんでした。2017 年、アグロフォレストリーを見に行きたいという理由で同じプログラムで三週間行った際にも、人々や食べ物、習慣など心が打たれるような文化の違いばかりで、衝撃を受けました。一年間滞在したら今までの常識が覆るのだろうか、価値観が変わるのだろうかという好奇心に駆られました。

実際に住んでいたところはブラジル人しかいないようなところでしたので、カルチャーショックがありながらも新しい発見があったりしました。大人数で共同生活をする上で気遣いや優しさを学びました。しかし、大人数で暮らし始めて最初の方はやはり問題ばかりでストレスも溜まっていました。自分で買ってきた日本の調味料が勝手に使われ減っている、イヤホンが無くなっているなどの物品の損失から、シャワールームが少ないことからトイレが時間によってとても混むこと、さらには食料品の管理が悪く腐り異臭を放つなどさまざまありました。そのような問題もすべて発言して意見を言い、きっぱりと主張をしなければ伝わらないということに気づき、途中からは積極的に意見を言うようにしていました。

ブラジルはアフリカ系の黒人からヨーロッパ系の白人、そして日系人のようなアジア人まで多様性に富んでいます。髪の毛の色から肌の色、目の色まで皆それぞれ違うのです。その中で暮らすことで自分の特色、どんな役割があるのだろうという問題に突き当たります。日本に住んでいると、ほとんどが日本の血を受け継いだ日本人ですし髪の毛の色や肌の色、そして服装さえも同じに見えてしまいます。日本文化は横のつながりが強いというのもあり、その中でなかなか自分を出すことは勇気のいることだと思います。私はそのような葛藤を少し抱いていたからか、海外の映画やドラマの登場人物のように、性別や年齢にかかわらず皆ハキハキしていて自分の意見を持っている、外の世界がいつも輝いて見えていました。きっとそのような人たちに近づきたくて留学がしたかったのかもしれません。

また、治安の悪さにも驚きました。日本では夜に女性が一人で歩いても特に危険と感じることはないと思います。しかしブラジルでは外が暗くなってきたら、一人で歩くのは危険です。いつ誰がどこにいるかわかりませんし、銃を持った人や違法薬物をしている人たちがよく街中にいるからです。そのような危機管理を自分でするということは

初めてだったので、毎晩外を歩かなければいけないときは怯えながら早歩きで歩いていましたが、井の中の蛙大海を知らずということわざがあるように、日本にいたときの私はまさに、このことわざを体現していたなと痛感しています。

４．日系人の歴史

次に私が留学を決めた 3 つめの理由は日系人の存在です。正直なところ、2017 年にブラジルを初めて訪れる前はブラジル日系人の苦労と成功というものがわかっていませんでした。そもそもどのような歴史を持ち、規模はどのくらいなのか、なんとなくの情報しか知りませんでした。

ブラジルには多くの日系人がいて、その規模は世界最大であります。どのような経緯でブラジルに移住し、目的は何だったのか。横浜にある JICA の日本移民資料館には何回か行ったことはあったものの、2017 年に行った際にはそこがよく理解できず悔しい思いをしました。また、私の所属している国際農業開発学科は昔拓殖学科という名前で、ブラジルに移民として卒業生を送り出しています。サンパウロには農大の会館がありパラー州ベレンには分会があります。ちなみにこの会館では世界の裏側にいながらも日本食が食べられます。留学初期は毎回会館で食べさせていただくご飯に感動していました。今回の長期留学では多くの先輩方に本当にお世話になり、私たちの実習を受け入れてくださいました。北はアマゾン地域、サンパウロより南にあるサンタカタリーナ、そしてサンパウロ近郊でそれぞれ農業や緑地管理などのお仕事をなさっている先輩方にお会いしました。どなたも、移住当時の暮らしを辛かったと語っていらっしゃいました。そのような時期を経ていま、それぞれ農業のみならずさまざまなお仕事をなさっています。基本的には、まず初めに現地の農業主のもとで下働きをし、徐々に農業主になっていくのですが、場所によっては農作物に病気が入ったり気候の変化などで被害が大きく出てしまったりと大変な暮らしを一時的に過ごされたというところもあります。パラー州トメアスという町は拓殖学科から農大生が一番初めに入植されたところなのですが、1970 年代からコショウの病害が蔓延し、収量が格段に減少し採算が取れなくなり、多くの人々が新しいコショウの栽培地を求めていったということがありました。そこから新しい作物や果樹の栽培が開始され、試行錯誤がなされたと聞いています。病気が一気に広がってしまったその時のコショウの単作農業が反省され、カカオやパッションフルーツが盛んに栽培され、アグロフォレストリーのきっかけである混作農業が始まったと言われています。

私にはサンパウロに遠い親戚がいます。祖母のいとこという関係なのですが、彼女の両親が移住し、彼女はブラジルで生まれました。そして子供が 6 人、孫が 7 人、ひ孫が 2 人いて、サンパウロに大きな家族を持っています。彼女の両親が移住したきっかけは母親のブラジルへ移住したいという気持ちからでした。彼女の母親は医者の勉強がし

たかったのですが、当時の日本はそのような環境ではなく、女性が勉強することには厳しい目が向けられていました。そこでそのような環境から抜け出すため、当時独身だった母親は同じくブラジルに移住したいという独身男性と結婚してブラジルへ渡ったのです。つまり、移住するために結婚したのですが、この感覚が今の時代にないため初めて聞いた時うまく理解ができませんでした。そののち、祖母のいとこが生まれ、日系の男性と結婚し大きな家族をもつようになりました。祖母のいとこはブラジルで生まれたので日系 2 世なのですが、その子供たち、つまり、日系 3 世以降になると結婚相手が日系ではなくなってきます。それまでは日系社会内の繋がりが強く、親も日系以外の人と結婚することを認めない風潮があったそうなのですが、最近はそういうこともあまりないようです。そのような家庭では家ではほとんどの場合がポルトガル語です。昔は盛んだった日系学校や日本語学校なども少なくなり、日本語に触れる機会が減ることにより、日本の血が混ざっていながらも日本語を一つも知らないという若者が増えてきたのです。中には生粋のブラジル人でも日本文化に興味があるという人も少なくないですが、先祖が日本人という日系の人々が文化を忘れ、興味が無くなっていくのを見るのが少し悲しかったです。祖母のいとこは子供や孫たちに日本語を覚えていてほしいため日本語を少し教えていたようです。そのように彼らの努力が垣間見えるととても嬉しいですし彼らに感謝したいです。

5．日本企業の進出やポルトガル語というマイナーさ

最後の理由は、ブラジルにおけるビジネスの可能性や将来におけるポルトガル語の重要性です。今現在、ブラジルに進出している日本企業は 200 を超え、さまざまなビジネスを提供しています。普段消費者が目につきやすい食品においては、日本文化が定着しているのも加わって、味の素やヤクルトが民衆の間で既に定着していたり、それ以外の分野でもよく日本企業の名前を聞いたりするように感じます。日本人は仕事ができる・賢い、そして商品の質が良いという評判もあってか、ブラジル人の日本人に対する期待も高いのかもしれません。私も留学中に何度か日本を褒められたり、日本語で話しかけられたりしました。それも元をたどれば昔移住初期の方々がたくさん働き功績を残したことが大きいと思いますが、現在ブラジルで日本人が働いて頑張っている証拠でもあるとも思うのです。そのような信頼が重なり、日本車や日本製の生活雑貨など、多少高価でも日本のものを選ぼうという結果になるのではないでしょうか。

進出するためには壁があり、労働コストの上昇、距離が遠いので物流コストが高い、税制問題などが挙げられますが、昨年の大統領選で大胆な政策を行う大統領に代わってからは 2019 年の営業利益の見込みが改善するということが企業への調査で分かったようです。（JETRO ホームページ）

また、流通コストなどを差し引いても、人口の多いブラジルをターゲットにするとい

うことは企業にとって大きな意味があると思います。特に農業関係の種苗会社や農薬の会社などは農業大国であるブラジルで大きな需要があると思いますし、きっと技術も日本の方がより高いと思います。

ポルトガル語を学ぶことの重要性ですが、近年、第二外国語として英語を話せることは当たり前になりつつあると思います。話者が多いことと、いまだ世界共通言語であることは間違いないのですが、これからの時代は中南米やアフリカで使える言葉が必要になってくると思うのです。そのなかにポルトガル語があるのですが、上述したように日本企業がブラジルへ進出するとなると英語でも日本語でもなくポルトガル語が必要になってきます。話せるようになると現地のスタッフと直接コミュニケーションが取れるのでより円滑になりますし、学生の場合ポルトガル語が話せるということは強みになると感じます。また、中南米ではほとんどの地域でスペイン語が使われていますが、ポルトガル語とスペイン語は似ているので、二つの言語の習得ができることの可能性が広がります。私は、英語をある程度学んでいたので、他の外国語、とくに発展途上の国で使われている言葉を学ぶことに大きな意味があると思い、ブラジルに行こうと決めました。

６．最後に

今回このような理由でブラジルに留学しましたが、この国に決めて本当に良かったと思っております。そこでしか体験できないこと、知るべきことが詰まっていたと感じます。いまだ世界に知られておらず広めていかなければならない問題点や、また反対に、良い文化や美味しい食べ物をたくさん知ることができました。

農大だからこそできた今回のブラジル留学は、とても貴重な経験です。渡航前から渡航中、支えて下さった職員の方々にはとても感謝しています。ありがとうございました。今回得た経験を糧にこれからも精進していきたいと思います。

図１：所属していた学生団体で
学生自ら育てているアグロフォレストリー

図２：サンパウロに住む遠い親戚と食事を
した際の様子